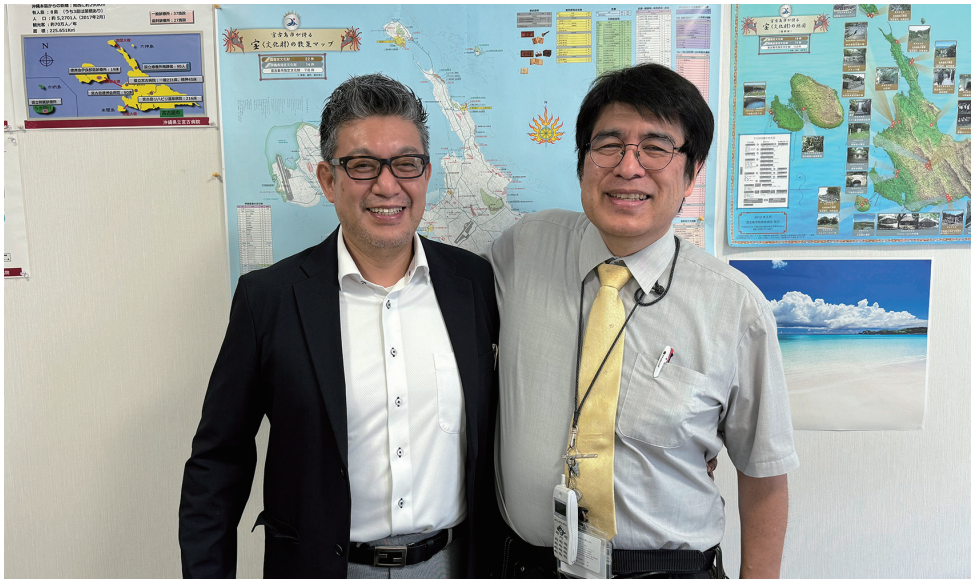
沖縄県立宮古病院 院長 川満博昭 先生



間仁田先生　県立宮古病院長ご就任おめでとうございます。

ご就任にあたってのご感想と今後の抱負をお聞かせください。

川満先生　私は1995年に医者になって、中部病院に行き、5年間研修した後、久米島病院に1年だけ最初の年に行きました。それから2001年に宮古病院に来て以来、ずっと外科で働いています。宮古病院について言うと、私も宮古出身ですが、宮古出身のドクターはあまり多くはないですが、何名かはいつもいる感じがあります。長くいる先生が管理職になることも多いと思います。

昔は医者が少なかった時代は確かに若い頃から院長になっていました。しかし、今期の話で言えば、私は一番若い院長になっています。これはいろいろな状況があってのことなんです。実は、僕は一昨年に医療部長になり、昨年副院長、今年院長に就任しましたが、これは特に僕が優秀だからというわけではありません。

医療部長になった頃は平和でしたが、その後八重山病院で色々なことがあり、八重山の院長と副院長が辞任なさいました。結果的に県立病院管理職の人材プールからいきなり2人抜ける事態になりました。その時、米田先生が副院長でしたが、定年1年前だったため、来年には副院長がいなくなることがわかっていました。

本来は誰かが副院長として宮古に来るはずでしたが、八重山に行かざるを得なくなり、宮古で誰かが必要となりました。そこで、去年、医療部長だった私が副院長になる話になりました。医療部長になった際も本来なら琉大の先輩である与那覇先生がやるはずでした。しかし、与那覇先生が事情で辞退なさったので、私に医療部長が回ってきました。

今年も岸本院長が定年で、同じように院長ポストが空きました。病院事業局長に、私が中部病院で外科研修を受けた際に指導していただいた本竹先生が就任して、その鶴の一声で院長になってしまいました。いくらなんでも、そんなに管理職の経験も勉強もしていないのに、なんだかなと思いながらの状況です。そんなわけで、すごく頑張っているというわけではなく、こういうものなのかなとも感じています。

間仁田先生　県立病院だとそうですよね。他の地域から県の人事で八重山から来たりすることもありますしね。

川満先生　そうですね。たまには外からくることもありますが、宮古病院の場合はだいたい宮古の人がなることが多いです。例えば、本永先生や岸本先生のように。なので、就任にあたっての感想を聞かれても、巡り合わせなのかなとしか言いようがありません。

間仁田先生　でも、大事なことだし、一生懸命やってきたということは伝わっていると思います。

川満先生　ずっと宮古でやってきたし、そんなに大きな間違いはしなかったかなと思います。それは評価してもらったのだと思いますが、そういうところですかね。こういうのは、特に、なりたくてなるものではなく、いろんな巡り合わせでなるものだから、その時の人の状況によるのかなと思います。

間仁田先生　みんなそうですね。私は今、新しく内科統括部長になったけれど、やっぱりなり手が居なかったり、いろいろな事情があって、もっといる同期の先生もいるので、そういうこともありました。

川満先生　それはあると思います。

間仁田先生　本来もう少し来るはずだった人がいたのですが、なかなか難しいですね。だから巡り合わせと言いながら、多分そういうのは運命だと思ってやって、頑張ったらいいのかなと自分でも思っています。

川満先生　それは、これまで一応それなりにやってきたからかなと思っています。

間仁田先生　では、今後の抱負についてお聞きします。

先生の病院長挨拶を見ましたが、非常に良かったですね。素晴らしいというか、形式的というよりは、先生が思っていることや気持ちが素直に伝わってきました。そうやってずっと歩んできたんだなというのが感じられる挨拶でした。ただ、実際に病院運営について考えていくと、また違った視点を持たなければならないのかなと思います。院長になるとそういったことが求められますね。

川満先生　そうですね。ポンポンと進んで、管理職に就いてもあまりわからないことが多かったので、何をおっしゃられても本当にわからない部分がありました。今、県立病院は経営的に厳しい状況で、公立病院もどこも同じように厳しいのが１番の悩みです。借金経営や自転車操業の状態で、そのあたりについてはまだあまり理解できていない部分もあります。病院経

営に当たって、医療費用の徴収についてや、実際にどこにお金が入っているのかなど、事務の人たちに助けてもらわないといけないと感じています。

外科のことはわかりますが、それ以外の運営方針については、みんなに助けてもらわないといけないと思っています。学んでいく必要があるというのが根本的な方針です。院長としても書いたことですが、宮古出身なので、宮古病院はしっかりと存在し、宮古の医療を回さなければならないというのが第一の使命です。救急や緊急手術もほとんど見ていますから、病院をいかに維持していくかが本当に重要だと思っています。そのためにはどうするかを考えて行かなければならないと思いますが、それにはみんなで協力しなければならないですね。

特に去年は看護師が辞めることが多かったです。看護師は毎年一定数辞める傾向がありますが、昨年は特に多かったように感じます。仕事が厳しかったり、結婚などの事情があったりするためです。辞める理由としては、看護部が孤立しているのかなと思う部分もあります。辞めていく人たちが周りと上手く繋がっていなかったのかもしれません。上から仕事をしろと言われたり、忙しかったりして、個人的なことや病院の診療についても周りと話すことが大事だと思います。

特に宮古の場合、長くいる看護師もいますが、毎年何十人もの看護師が新たに来ます。そのため、宮古のことをよく知らなかったり、初めての病院であったりすることがあります。ドクターも同様で、毎年 20 人ほどの入れ替わりがあります。ホームグラウンドではないということもあり、うまく連携し、知り合いになって様々な話ができる関係がないと、続けていくのは厳しいのかなと思います。

昨年、私は副院長だったのですが、振り返ると、少しまずかったなと感じています。そうしたことが辞める理由につながったのかもしれません。宮古は比較的規模が小さいため、大体半年くらいで顔がわかるようになります。医局の

規模でも全員の顔を覚えられますが、もっと大きくなると誰が誰かわからなくなります。宮古はその点、顔もわかりやすく、昔から仲が良い病院と言われています。ただ、コロナの影響で飲み会にも行けないことが多く、昨年は特に疎遠になったことが、辞める人が多かった要員かもしれません。

病棟も定員をすべて開けられず、昨年の後半にはさらにベッドを閉めたりしました。病院がきちんと動かないのではないかという危機感はあります。この調子で人が入れ替わったりしたらどうなるのか、いなくなったらどうなるのか、本当に心配です。

間仁田先生　ベッドが開けられないと、収益どころじゃないですね。

川満先生　それもありますね。いろんな要因が絡んで収益が悪化し、そもそもきちんとした医療を提供できるのかという話になってきます。ちょっと危機感も感じています。だから、なによりも宮古のために病院をしっかり動かさなければならないと思っています。そのためには、職員全体が無理をして回せない状況ではいけません。やっている人たちがそれなりの余裕や楽しさを感じながら働かないと、とても実現できないと思います。去年はその点が課題だったと思います。

今年は、まず、名刺の裏に書かれている「地

域と患者さんと職員が笑顔あふれる病院」というビジョンを大切にしています。今までは、医療は患者さんを笑顔にするために頑張ろうという感じでしたが、職員自身が笑顔にならなければ、結局地域のためにならないと思います。だから、今年の初めに5月にみんなでビーチパーティを開催しました。病院全体のイベントとして、久しぶりに行い、約80人が参加しました。もちろん、みんな仕事をしているので全員は来られませんでしたが、もっと飲み会をしようという感じで、コミュニケーションを活発にしていこうと考えています。あのイベントは楽しかったし、天気も良かったので、梅雨前の時期でちょうどよかったです。

間仁田先生　やっぱりそういうのは、なんだかんだ言って、今でも大事だと思います。飲む飲まないに関わらず、そういう場を作ることが重要です。

川満先生　どれくらい効果があったかわからないけれど、やっぱりそういうメッセージを伝えることが大事です。管理職もみんな参加して、みんなでワイワイと過ごすことができました。コミュニケーションを取ることが重要だと思います。

また、看護部との関係についてですが、他のことはわかりませんが、看護師さんの業務に関しては、あまり人事に関与するものではないと思っています。仕事上でいろいろ指示を出したりはしますが、それ以上にはあまり踏み込まないようにしています。

それが逆に良くないなと思うのは、結局、週に1回幹部会を開いて、院長、副院長、部長、課長などが集まるのですが、看護部の看護部長や副部長も参加します。そこでいろいろと話し合ってきましたが、経営についての議論が続くと、看護部としては「もっと頑張らなければならないのかなと」と感じることがあると思います。去年はそのあたりでちょっと頑張りすぎた面もあったと思います。

また、看護師は意外と体育会系のノリがあり、上下関係が厳しいところもあると思います。去年、退職者が多かったのもこの影響があったのではないかと感じています。そこはもっと関わりを持たなければいけないと思いました。指示するのではなく、「どうなの？」とという感じで関わっていく必要があると思います。

一応、師長会もあるのですが、月に30分ずつ出席して、現在の取り組みやこうしてほしいという話を始めたりしています。看護部長とはもともと仲が悪いわけではありませんが、経営に関連したコミュニケーションをもっと深めていこうと思っています。

間仁田先生　確かに、市立病院の幹部の先生方は、そういう意味で少し一緒に考えていると思います。こういったこともいいかもしれませんし、一緒に「こういうことも考えていかなければならないよね」という材料を持ち寄って、一緒に考えていかないといけません。やっぱり彼女たちにはそれぞれの考えがありますが、逆に固まってしまっている可能性もあると思います。

川満先生　そうそう、結局、大勢いる割には逆に孤立している感じがあります。看護部の中では、看護部内で片づけるような雰囲気もあると思います。パワハラのような問題も指摘されたりしているので、そのあたりはもっとオープンにしていかなければならないと思っています。

間仁田先生　いろんな部署の大きさから言えば、やっぱり看護部が一番です。

川満先生　そうですね、別にあまり人事に口出しするつもりはないのですが、何が起きているのか、またメッセージとして伝える必要があります。結局、経営において一番重要なのは、病棟の入院患者が増えることです。外来よりもそれが経営に直結します。ただ、これをあまり強調しすぎると、無理をして頑張りすぎることになり、看護部内の各病棟では厳しい状況が続

いてしまいます。「もっとやれ」と言われると、仕事がますますきつくなり、最終的には辞めてしまう人が増えてしまうかもしれません。

間仁田先生　なかなか難しいですね。

川満先生　そういう風になっていたんじゃないかと、去年思いました。今年は、そういうことにもっと口を出して、顔を出して実際にあまり頑張りすぎないようにメッセージを出していこうと思っています。今年はベッドの数を減らしてスタートした病棟もあります。それは、新人が来るからです。宮古病院には約50人の新人が来ており、10人が1年目、さらに2年目、3年目の人も多いです。要するに、看護部としても、看護師の質を担保できない状況です。最初は2､3ヶ月の研修もあるので､その状態でベッドをフルに開けておくと、疲弊してしまいます。そこで、弱めにスタートして、徐々に慣れてきたらベッドを少しずつ増やす形にしています。

あとは、やっぱり休みが取れないとか、取らせないという問題もあったようです。今年はどうか分かりませんが、年休を取る人が多く、病棟を減らすことも構わないと言っています。結局、長い目で見て、ちゃんと休ませないといけません。マラソンみたいに、1年間が続くわけですから。

やっぱり去年はそういうことが少しあったようで、忙しかったからです。師長はどうしても回したいし、結婚式があるから休みたいと言ったら､それはダメだという話もあったようです。それはひどい話です。それだったら､極端な話､他の病棟から人を借りてでも回すとか、もっと連携を取ってやるべきです。極端なら、ベッドを出してもいいと思います。

間仁田先生　でも、なかなか言いにくいですよね。院長としては。

川満先生　言いにくいけれども、やっぱりみんながそれなりに笑顔を持てるようにしないといけないです。特に看護部には負担がかかっていることは間違いないです。そうしないと、結局1年間持ちません。去年の後半は人がいなかったため、収益も落ちました。今年はどうなるかわからないですが、まだ半分しか経っていないので、そういう運営方針を考えながら進めていく必要があります。

間仁田先生　川満先生の病院の根底にあるのは、職員の現場力です。やっぱり基本は、その現場で楽しくできないといけません。

川満先生　医療はまるでマラソンのようなもので、今年中に何かを達成したからといって、来年で終わるわけではなく、ずっと続いていくものです。それを実現するためには、厳しい状況でも頑張らなければなりません。しかし、頑張りすぎてしまうと、長続きしないと思います。楽しく、ある程度余裕を持って業務を行えるようにしていかないと、持続可能ではないと感じています。

間仁田先生　やはりどこの病院も含めて、医師不足や救急医療、特に医療資源の確保という問題があります。特に離島である宮古はまだ大きいかもしれませんが、こうした離島においては、現在の状況や今後の課題が存在します。

川満先生　なるほどですね。確かに医師に関して言うと、宮古は昔から「ドクターがもっと欲しい」との声がありました。大昔に比べれば今は多くなりましたが、実際にはまだ足りていない状況です。特に、以前は半分以下の医師数で運営していた時代もありました。

私もいきなり管理職になった影響で、どう対処すべきか考える日々です。現在、各医局からの支援を受けている状況です。琉球大学も協力しており、救急医療や脳外科の医師が福岡から派遣されることもあります。これから琉球大学に行って、教授との挨拶なども行う予定で、学びを続けています。

応募を出していることもあり、新しい医師が来ることもあります。特に外科の西原先生は、沖縄が好きで、数年前から宮古に来ている先生です。最初は宮古に２年間在籍した後、北部病院に移り、その後再びこちらに戻ってきました。この先生は素晴らしい方で、一般外来や消化器外科を担当されています。また、宮古で腹腔鏡手術もきっちりと行えるようにしてくれました。私自身はずっとこちらにいるため、腹腔鏡は少しだけ行っていましたが、手際よくこなすのは難しいと感じていました。

西原先生は宮古を好んでおり、外科医も連れてきてくれるので、ネットワークが広がっています。これは本当に幸運なことです。現状の対応としては、支援をお願いしに行くことや、宮古に来てくれる先生を募集する事があります。内科の藍原先生も元々別の地域にいた方ですが、宮古に来てくれてありがたいです。話を聞くと、彼はもっと多くの事をやりたかったものの、あまり自由が効かず、やりたいことができないという不満があったようです。

間仁田先生　話は聞いています。

川満先生　伺ったところによりますと、そういった感じのようです。以前いた地域でもっと自分のできることを活かしたいという気持ちもあったようで、大きな病院での仕事はそれはそれで良いのですが、少ない規模のところでもやりたいという思いがあったようです。宮古の場合は逆に孤立しているため、運ぶのが難しいのですが内地では運べるので、地続きだから、私たちの病院でわざわざリスクを冒して、多少儲かるとしても、あまりやらないでほしいと言われると、少し可哀そうだなとも思います。ただ、宮古では逆に運べないですし、できるところまでやって、ダメならヘリ搬送などもあるので。そういう事で、ある程度やりたいことを自分のスキルでみんなのために活かしたいという気持ちがあったようです。私が伺った話では、そういう風に来てくださる先生もいらっしゃいますし、地元のドクターでも、毎年とはいきませんが、何年かに１人はいらっしゃったりします。

間仁田先生　宮古出身の琉球大学を卒業した先生や、他の大学に通っていた先生が来るんですね。

川満先生　住みつくようなことも少しはありますが、医師はそのように確保しています。何をどう考えるかというよりも、やるしかないという感じで、あらゆる手段を尽くしています。

間仁田先生　やはり、人材確保が一番重要だと思います。院長としては、お願いに行くこともそれなりにあるのかなと思います。

川満先生　人材確保にシステマチックな特別な方法があるというわけではなく、やはり人のつながりが大切だということです。それは県立病院全体に関わることで、院長会議でも話題になりましたが、やはりそれが一番難しいですよね。

間仁田先生　確かにそうですね。
離島、特に宮古では、他の県でも話題になるように、今、住居費が高いですね。

川満先生　そうなんですよ、これが。本当にここ数年のことなんです。

間仁田先生　聞いてびっくりするくらいの値段を払わないといけないですよね。

川満先生　宮古にない状況が発生しています。今までにない状況です。これは本当にコロナ前にはなかったことで、宮古も観光地ではありますが、石垣ほどではありませんでした。これまではそうだったのに、急に観光地化してきました。そのせいで、ホテルの数は本当に増倍し、数年前から増え続けています。その際、建設に関わる人たちがきて、アパートがすぐに埋まってしまいました。挙句の果てには、それらの人たちのための住居も建てられましたが、結局、そこからはもう空きがなくなってしまいました。今度は、そこで働く人たちが住まなければならない状況になり、本当に急激な変化がありました。

間仁田先生　なるほど。需要もかなり増えましたね。

川満先生　そうそう、急にアパートの状況がありえない形になってきました。ひどいことに、少し古いアパートでも、突然値段が上がってしまって、それでも入る人がいるのだと思います。だから、それまで見ていた人たちの中には、ちょっと考える人もいたりして。いや、これが本当に、かなり困りますね。

間仁田先生　本当にワンルームで、7万円や8万円などと聞きました。

川満先生　かなり高いですね。

間仁田先生　賃料が倍くらいになってしまっていると言っていました。

川満先生　それが本当に今の状況で、だから、借り上げを増やそうとも考えています。宿舎は古いものもあるんですが、結局借り上げていると、高いアパートを借りて安く貸すことになってしまうんです。

間仁田先生　そうですね。来てくれると言っても、実際に住んでみるととても高いと感じることが多くて、給料とのバランスを考えると、これをどうしていくのかなというのが、離島、特に宮古での問題になりそうですね。

川満先生　これはかなり困ったなと思うところもあります。毎年、異動する人たちがいるので、一応その人たちがいたところである程度は回せていますが、たまに途中で入ってきてほしいときがあり、募集もしているのですが、そういう時に、本当にこれではいけないのかなと思います。

間仁田先生　確かに、意外と気づかないけれど、びっくりするくらいの値段になっていると思います。家族で来たら、10万円を平気で超すこともあるようです。

川満先生　それは今、本当にちょっと困っています。状況が改善されないのです。

間仁田先生　借りるにしても、建てるにしても、ある程度の金額が必要ですよね。

川満先生　コロナ前やコロナ禍にも建設していて、結構進んでいます。コロナ禍で少し影響はありましたが、それでもかなり建てていました。ホテルも増えていますし。

コロナ禍で観光が落ち込んでいましたが、それでも平気でたくさん建てる感じです。一般の人たちには見通しがあるんでしょうね。やっぱりお金があるし。

結局、今振り返ると、そのホテルはみんな開いていて、全然問題ありませんでした。だから、アパートの状況はコロナ禍もそんなに改善しなかったんです。結局、建て続けているから、今もずっと建てていると思うのですが、最近またいろいろ値上がりしているので、アパートを建てるのも大変ですよ。

間仁田先生　県立で作ると言っても、簡単にはいかないと思いますよね。

川満先生　昔宮古病院で働いていた人が、今は実業家ではないけれど地元にいて、その人にお願いしてアパートを建ててもらっています。そこで、宮古病院がそのアパートを借り上げようという話がちょっと出ていて、1棟を借り上げて、そこを寮のように使わせてもらおうと考えています。

間仁田先生　何かしらのインセンティブがなくても住むところを安く借りられますよと言えば、来てくれる人も確かにいると思います。

川満先生　あと、先日初めて知ったのですが、石垣では新規に移り住んだ看護師が2年間石垣の病院で働く場合、40万円の転居費用を出す制度を始めたらしいです。これ、宮古でもやってくれないかなと思っています。

間仁田先生　そうですね。何事も確かにお金がかかることですが、そういうのも人材確保のための投資と思ってくれるかどうかが重要です。

川満先生　昨日、宮古地区医師会の集まりがありました。僕はずっと県立病院にいたので、医師会には入っていませんでした。研修医の時に入って、そのままずっと過ごしていたので、医師会についてあまり言われたこともなかったし、勧誘されたこともありませんでした。そのまま来たのですが、今回は院長にもなったし、田名先生も医師会の会長になったので、これはちょっとちゃんと入らなきゃと思って、実はこの前入ったんです。

公務員医師会には入っていますが、医師会との接点があまりなかったので、気にせず来てしまいました。しかし、最近初めて地区医師会に出席した際、徳洲会の院長先生が新城先生で、石垣ではこんなことをしているという話を聞きました。これを持ってきてくださって、宮古地区医師会としても、宮古島にこういう働きかけをしてはどうでしょうという定案をしていました。

とにかく、アパートの状況は本当に困っています。一応、病院としては地元の人にアパートを建ててもらい、それを全部借り上げるようなことができないかと考えていますが、少しずつ進めています。

間仁田先生　これは離島が抱える問題の１つだと思います。

川満先生　古いものもあるんですが、もう30年が経っていますから。

間仁田先生　看護師も通常は、県から異動されてきた人たちは自分で借りているんですか？

川満先生　そうそう、20軒くらいはあるけれど、もっと多いので、普通はアパートを借りて生活しています。今は本当に空いているところが少なくて、12万円とかの家賃の物件もありますが、そこに入れるかどうかの話です。1人、可哀そうなことに、その人は内地から来た人で、来てみたらちょっと維持できないみたいで、困っています。

間仁田先生　市立病院でも少し、せっかく来てくれる人には、何かしらの手助けとして、住居の斡旋をしたり、安く借りられるような努力を少し始めているようです。

川満先生　特に今、看護師が不足してます。医師もそうですが、今病棟が開けられない状況です。

間仁田先生　そうなると、医師よりも看護師が重要かもしれませんね。

川満先生　医師ももちろんいないと医療が成り立ちませんが、これは深刻な状況です。聞いたところによると、看護学校に入学しても、卒業するまでに少しずつ辞めていくようで、下手をすると半分くらいが辞めてしまうとか。最近は、もしきつかったら別の仕事をしたらいいよという雰囲気が広がっていて、結構辞める人が多いです。そもそも看護師になる人自体も少なくなってきていますが、需要は高いから、今度琉大病院が移転することも影響しているんです。琉大病院はかなり試験を早めて、早期に人材を確保しています。その影響で、今年度の県立病院は少し厳しい状況になっています。もともとは応募者は少し多かったのですが、今は応募者が減って試験を受ける人も少なくなっています。来年度はさらに心配です。

間仁田先生　やっぱり看護師も大事ですよね。

まだ臨床もおこなっているのですか？

川満先生　はい。急に院長になったので外来患者さんを減らせなくて。

間仁田先生　そうですよね。

川満先生　まだちょこちょこ手術もやっていることがあって、それは将来的にはやはり少し減らさないといけないと思っています。しかし、がんの手術なども行っていたので、忙しくなったからといって、簡単に右から左に回すわけにはいきません。

間仁田先生　ちょっと本末転倒のような感じですね。

川満先生　ですので、だんだん減らしていこうと思っています。

間仁田先生　今回田名先生が会長になられましたが、医師会に対するご要望等ございますか。

川満先生　そうですね。これまで個人的には、宮古は昔から宮古地区医師会と県立病院の仲が良くて、コロナ前は新年会や忘年会が行われていました。今年も新年会を開催してくれました。宮古病院から何名かが参加し、そこで挨拶を行い、楽しく過ごしていました。忘年会にも医師会の先生が来てくださったりして、そういう関係がずっと続いていました。

医師会の先生方と県立病院はこれまで非常に良い関係を築いてきたと思いますし、今でも仲が良いと思います。しかし、僕自身は医師会には入っていなかったので、今年田名先生が会長になり、私が院長になったこともあって、今回入会しました。田名先生にお会いした際には、宮古や八重山の地域医療の部会を立ち上げて、もっと力を入れていきたいというお話がありました。

宮古地区医師会との関係は良好で、できることはもっとあると思います。コロナの時も協力して乗り切れたと思いますが、そういった取り組みをさらに広げていきたいです。宮古だけではなく、県全体という意味でも、もっと関わっていきたいと思っています。これまで沖縄県医師会にはあまり関わってこなかったのですが、院長になったことをきっかけに、もっと積極的に参加したいと考えています。

具体的に何ができるかはまだ分からないですが、関わることで新たな可能性が見えてくるのではないかと感じています。

間仁田先生　沖縄県医師会の広報委員会では、離島の先生方が委員に入っていないため、現場での意見交換が必要です。私も行ける時は参加し、行けない時はZoomで参加しています。そうした中で、提案をする機会もあると思います。広報委員会では、さまざまな専門の先生に生涯教育に関する記事を書いてもらったりしていて、広報誌には宮古や八重山に関する情報も載せています。しかし、会議のメンバーの中で決まってしまうことが多いので、特殊な領域は別として、これらの情報を共有することが重要です。

こうした雑誌は多くの人に読まれているので、宮古で行っていることを広めるために一緒に関わっていけるかもしれません。また、広報委員会だけでなく、さまざまな活動に参加することで、知り合いも増えていくと思います。もちろん、忙しくなることもあるでしょうが、それが楽しいと思っているので、僕も辞めずにずっと続けています。

川満先生　今となってみると、各病院でみんな診療を頑張ってきたけれど、最近になっていろいろとこの年代の繋がりが重要だと感じています。

間仁田先生　ちょっとだけ違ったステージで、同級生が意見を交わせるという意味では、良いと思います。

川満先生　今まであまりそういうことを考えてこなかったのですが、要望や期待を通じて、何かできるかを繋がって話合えればと思います。その中で何かを見つけて実現したいという期待や希望を、僕は沖縄県医師会に対して持っています。

間仁田先生　やっぱり宮古については、確かに雑誌の中でもそこまで多くは取り上げられていないのかなと思います。しかし、何かを通じて参加してもらうことで、少し異なる話題が見えてくるのかもしれません。離島の問題など、いろんなことがまた出てくるでしょう。

川満先生　どうしても地理的な問題もあるし、これまでも関係がなかったわけではないと思いますが、若干それが影響していたのかなとも思います。こちらも、あまり関わっていなかったというのもあったと思いますが、宮古地区医師会の武井先生はよく知っているので、いろい

ろと関わっていく力強い先生だと思います。今後、何かいろいろとできればなと思います。

間仁田先生　市立病院には市立病院医師会があり、私も広報委員にしてもらっています。しかし、市立病院が那覇市医師会に入ることになり、一度解散しました。その後、那覇市医師会にはほとんど全員が入れるようになり、病院がその負担をしています。もちろん、その結果、那覇市医師会の理事にうちの院長が就任しているので、一緒にやれる感覚は強くなったと思います。市立病院医師会はどうしても孤立してしまうため、いろんな医師会と市立病院が一緒に連携できるように、わざわざこのような形で今進めています。良い形になっているのではないかと思います。

川満先生　それはそうだと思います。

公務員医師会でもそうでしたが、昔は公務員医師会はそれなりに力がありました。しかし今は、ドクターの数が昔に比べて非常に増えています。したがって相対的に県立病院の規模も小さくなっています。要するに沖縄県医師会が強くなり、ドクターの数が増えていることでできることも増えております。そういう意味では、県医師会ともっと上手く関わっていかなければならないと本当に考えています。

間仁田先生　最後に、日頃の健康法や趣味、座右の銘についてお聞かせください。

川満先生　私は元々あまり運動をしていなくて、中学校の時にはバスケットをしていましたが、医者になってからは特に体を動かすことが無くなってしまいました。最近では高血圧と糖尿病のために薬を服用しており、強いて言えば、靴に少し重りを付けていて、少しでも運動量を増やそうと考えています。

間仁田先生　結構重いですね。こんなのが売っているんですね。

川満先生　売っているんですよ。飛行機に乗る時にいつも忘れてしまって、引っかかるんです。何年も前から、一応、せめて何か普段慣れておこうと思っているんですが、結局歩かないので、家から病院まで1.9キロあるけれど車で来るからあまり意味が無いんです。ただ、病院の中くらいでもと思っています。最初は重かったですが、慣れると全然普通なんです。たまに普通の靴を履くと足が軽いなと感じることがあります。

一応ジムができたので、契約したのですが、結局最初の1、2ヶ月だけ行って、お金だけ取られている状態なのでどうにかしないといけません。

間仁田先生　「24時間利用できます」と言われて私も試してみたものの、毎月7,000円無駄にしているだけです。

川満先生　そろそろジムは解約しようと思っています。

シューズは、マッスルトレーナーというシューズです。

間仁田先生　趣味は手術ですか？

川満先生　外科なので手術はあるけれど、そうですね。あとは、個人的な趣味としてパソコンゲームが好きです。

間仁田先生　本格的なやつですか？

川満先生　本格的なものというか、暇な時に家で何も考えずに楽しんでいます。それくらいですかね。あまり学生の頃と変わっていませんね、昔スーパーファミコンをやっているのとあまり変わりません。あとは、年に1回休みを取って旅行に行ければと思っています。

間仁田先生　座右の銘は有りますか？

川満先生　今年から病院のビジョンを作ることになり、「地域と患者と職員が、笑顔あふれる病院になる」というのを名刺に入れさせてもらったので、これが、座右の銘というか、目標になります。院長挨拶にも書きましたが、「人生は出会いと別れ」。座右の銘と言えばそれになると思います。大学の頃の熱帯医学研究会の岩永先生がいつも言っていて、人生は出会いと別れだと良く仰っていました。

あの時は、なんだろう、どういう意味かなとしか思わなかったのですが、今となってみると、出会いと別れがあるんだなと感じます。結局、いろんな出会いがあって人生が作られているし、別れる時には気持ちよく別れることが重要だと実感しています。そういう風に思ったりします。

座右の銘というか、思い出すのはそれですね。言葉としては、今となってはすごく深い意味を持つように感じます。何かを書こうと思ったときに、ぱっと頭に浮かびました。変な話ですが、医者になって人の死に目に会うことが多くなりました。死に目というのは、その人の人生が凝縮されているようで、その人がどう生きてきたかが、周りの人に影響を与えるのです。一生懸命生きて、人に良くしてきた人は多くの人が集まりますが、そうでなかった人は少なかったりしますね。

そういうことをだんだん思うようになりました。まさに出会いと別れの究極の場面をいっぱい見ているなと感じています。

PROFILE

1968 年	沖縄県沖縄市で生まれる
1970 年	父親の故郷、宮古島市伊良部島へ家族で転居 以後　伊良部島で過ごす。伊良部小・中学校へ進学
1984 年	新設された伊良部高校へ進学（一期生）
1987 年	琉球大学医学部医学科入学
1995 年	沖縄県立中部病院外科研修医
2000 年	外科研修終了し公立久米島病院創設 1 年目の外科医として赴任
2001 年	沖縄県立宮古病院へ外科医として赴任
2020 年	宮古病院消化器外科部長拝命
2022 年	宮古病院医療部長拝命
2023 年	宮古病院副院長拝命
2024 年	宮古病院院長拝命

間仁田先生　家に帰そうと一生懸命努力している人もいれば、誰もいない場合もあります。本人は帰りたいと言っているけど、難しいですよね。

川満先生　むしろ、家に来なくていい、病院で診てくださいという方もいました。お話を伺うとその方の人生がこれまでどのようであったかということが分かります。

間仁田先生　良い出会いと良い対応をしてきたかどうかが分かりますね。

川満先生　良い出会い、その出会いをどのようにしてきたかというのが見えると思いました。そういうことを少し感じます。

間仁田先生　本日はどうもありがとうございました。

インタビューアー：広報委員　間仁田　守